

大学が提示する「知」とはなんだろうか。

現在の大学に教員として勤務するようになって、あつという間に1年が過ぎた。最も大きな変化は、8年間勤めた前任教では教員養成の学部であったのに対して、現在はリベラル・アーツの伝統をくむ学部だという点である。私自身の研究分野や担当する授業が「教育学」であることに変わりはないけれども、それを受講する学生が、教師になるための「専門知識の一つ」としてではなく、多様な社会人や市民となるための「教養」として「教育学」を学ぶという事実は、私の授業組み立てや取り組みそのものに本質的な変化をもたらした。

これは、限定された範囲の学生たちに専門的な「知」を提示してきた大学が、「ユニバーサル化」を経て、多種多様な目的やキャリア設計をもつ学生たちに「知」を提示するという新たなミッションを得ようとしていることと深く結び付く。そうした大学自体が提示する「知」の変容に触れながらの授業運営は、私自身にとって非常に有

私の授業実践

教育現場の最前線から

教師と学生の「協働の学び」の可能性——「知」へのアクセスを再構築する大学の「授業」——

尾崎 博美

● 東洋英和女学院大学人間科学部准教授

益な学びをもたらしている。

その学びの第一は、授業で提示する「知」が、教師と学生が協働する過程で形成される「体感」である。言い換えれば、学生が大学の授業を通して獲得する「知」とは、固定された知識（情報）を単に蓄積することではなく、むしろその「知識」（情報）にどのように向き合うのかという「知識との付き合い方」であること、いまさらながらの「実感」である。

例えば、私の担当授業は「教育学概論」や「教育哲学」のような、講義を主とするものが多い。それらの授業では、必ず「問い」を導入に用いる。「教えることの意味」をテーマとする授業の導入では、「『学』という漢字を教える」「生活習慣を教える」「優しさを教える」といった「教える」という語を使用する事例を複数種類挙げた上で、「これらを『教えるのが難しい』と思う順番に並べ、その理由を説明してください」と学生に問いかける。授業の中では、関連する知識（情報）をまだ何も与えてい

ない段階で、問いを「突き付け」て「自分の考えを言葉化すること」を求めるのである。学生たちは「言葉にするのが難しい」「こんなこと考えたことがない」「普通に使っているのに説明できない」と（何の解説もしていないのだから当然であるが）、悲鳴にも似たさまざまな反応をみせながら問いと向き合ってくれる。その様子を授業者として、「楽しそうだなあ」と思いながら眺め、また「どのような答えが返ってくるのだろう」と期待をしながら教室を巡回し、時には質問した学生と言葉を交わす。この時、授業者である私は自分も授業の参加者として、その授業を始める前には得ることのできなかった「未知なる何か」に出合うことを予感している。

「問い」から入る授業において、その予感が裏切られることはめつたにない。それは、学生の背景や目的が多様であり、かつ授業の位置付け自体が多様さに開かれているからこそその利点であろう。協働の「知」を想定する場合、学生の多様さは授業運営の困難要因ではなく、授業展開の材料や手がかりの深化要因となり得るのである。

学びの第二は、学生と学生との協働の形が、思った以上に多様な形で有り得る点である。それは、表面的な形式の変化にとどまるのではなく、学ぶことの質そのも

のを変容させる。例を挙げると、「教育学概論」の授業では、先に挙げた「問い」に対する学生たちの答えの提出に、学習支援アプリ「respon」を活用している。「respon」は、学生がスマートフォンを使って回答を打ちこんで送信すると、即時に回答が集約され、スクリーンに映し出される機能をもつアプリである。「問い」が選択式の場合にはグラフ化され、自由記述の場合には一覧化される（図1）。さらに、集約された回答は、学生各自のスマートフォンでも即座に閲覧できる（図2）。結果として、学生は200人弱の受講生全体の回答を相互参照することが可能になる。



図1 グラフ化・一覧化される回答



図2 学生間で回答を相互に参照

このアプリの活用は、当初、前任校でいわばFDの一環として一斉導入されたことがきっかけであった。それを使用するまでの私は、コメントペーパーを使用した「問い」「回答」のやりとりで十分だと考えていた。せいぜい、学習支援アプリを使用することによってコメントペーパーの回答をデータ化する手間を軽減し、授業の効率化ができるかと捉えていたのである。しかし、実際に「Response」を使用してみると、投げかけた「問い」の答えをリアルタイムで共有し反応を返すことができること、一つの教室の中で学生自身が作り上げる回答テキスト群やグラフが「教材」として即座に使用できることなど、もたらされた効果は想像以上のものだった。というよりも、私自身が授業に対して「実際には、こうできたらいいな」と思っていたことが改めて可視化されたというほうが実感に近い。その意味で、FDとは教員の現在のニーズに配慮するだけでなく、教員自身が認識していないニーズを可視化するところにその意義の一つがあるのだろう。

中でも、最も大きかった効用（授業の質の変化）は、学生の回答が200人規模で即座に閲覧し合えるようになったことによって、学生の「問い」に対する向き合い方が変化した点である。「Response」を使用した授業を見学

した方のコメントで、忘れられないものがある。

「先生が出した『問い』に、学生たちが、スマートフォンを使っても誰一人『検索』しようとしなくて、自分の答えを書いていたことが衝撃でした」

こちらこそ、このコメントが衝撃であった。なぜなら、学生が回答を『検索』するかもしれないと危惧したことはなかったし、そうすることの意味もないと考えていたからである。

実際に学生が『検索』ではなく『回答』に取り組んでいる姿勢に触れると、私の授業で提示したい「知」とは、『検索』では見つけられないアクセスを求める「知」なのだと改めて気付かされる。「ただ一つの固定された正答」ではなく、「場合によっては誤解や正反対の内容も含む多彩な回答」の中に学生自身が身を置くととき、その思考は自ら質を変えている。私が提示した情報以上のことを、学生自身が学んでいるのである。それをもたらすのが学生間の相互のやりとりであり、それを可能にする学習環境・ツールであるという点に、大学の「授業」というものの自体の可能性を感じずにはいられない。

学びの第三は、大学における教員同士の協働の学びがもたらす有益性が、個々のディシプリンに強く根付いて

いる点である。大学教員であり研究者である以上、その研究の文脈における協働がディシプリンに根差すことはいうまでもない。しかし、それだけではなく、「授業運営」(大学における教育)それ自体がディシプリンに基づく協働の学びをもたらし得ることは、「教育学」を専攻する者として大きな喜びを伴う「発見」であった。それは、研究者である大学教員が「教師」として学生に授業を行うとき、どのように個々のディシプリンを「授業化」するのかというプロセスの可能性の拡大である。

「大学の教員はそれぞれの専門分野が異なる」という点は、一方では画一的な授業変革を求めることの危険性を提示する。他方、その違いは「授業化」プロセスの多様な形を提示し合うためのリソースでもある。端的にいえば、大学教員の研究分野がもつ独自性は授業運営における教員間の協働を阻むものではなく、相互参照と広範な解釈を通すことによって、互いの授業化プロセスに対する省察とその豊潤化をもたらし得る。それは、確たる研究に根差した見識をもつ大学教員にしか成し得ない「授業化」プロセスである。

例えば、経済学を専門とする同僚が次のように言ったことがある。

「学生の中には経済Ⅱ数学だと思っている者もいるが、自分は経済学の授業で数学を教えたいわけではなくて、『経済』という視点から世界を観る『見方』を教えたい」

この『世界の見方』こそ、前述した『検索』では見つけられないアクセスを求める『知』そのものに他ならない。そうしたディシプリンに根差した『世界の見方』がそれぞれに異なることを踏まえると、「世界の見方」の教え方」の違いがどれほど多様になるのか、想像もつかない。もちろん、その違いの全てがポジティブになると考えることは楽観に過ぎるかもしれないが、大学教員にはそれを解釈し合う自由が、まさにアカデミズムの下にあると考えたい。

以上、教員と学生、学生と学生、教員と教員の三つの面から大学の授業における「協働の学び」を私自身の経験として、また現在進行形の営みとして述べてきた。かつては「限られた知識(情報)」という希少性によって説明されていた大学の「知」の意義は、現在では「知識(情報)」へのアクセスそのものを質的に変化させるものとして説明されよう。こうした気づきを与えてくれた前任校、および現在の大学の同僚と学生に心から感謝を捧げ、明日も研究と教育に向き合っていきたい。

時代が求めるたくましい看護師の養成

1 看護学部開設まで

東京情報大学は、1988年、情報化社会の真つただ中で、校名に「情報」を冠した初めての私学として開学し、今年、創立30周年を迎える。設置母体である学校法人東京農業大学は、開学126年目となる東京農業大学（東京）と本学（千葉）のほか、併設校として東京農業大学第一高等学校・中等部（東京）、同第二高等学校（群馬）、同第三高等学校・附属中学校（埼玉）を擁し、2019年4月には、東京23区内では59年ぶりとなる小学校新設を予定している（設置認可申請中）。東京農業大学は、近代日本を切り開いてきた明治の英傑・榎本武揚によってその前身が創設され、初代学長横井時敬が「稲のことは稲に聞け」「人物を畑に

還す」と農業に新しい風を吹き込み、以後「実学」を重んじる大学として発展しながら、多くの人材を社会に輩出してきた。

本学の建学の精神は、榎本武揚のバイオニア精神を継承した「未来を切り拓く」、教育理念には兄弟校東京農業大学の実学精神を継承した「現代実学主義」を掲げ、情報化社会の変化に対応できる人材を育成してきた。さらに、2017年4月、これまでの総合情報学部に加えて看護学部を新設し、少子超高齢・情報社会の未来を切り拓く看護師・保健師の養成をスタートした。

全国の大学の3分の1に当たる約270校に看護学科が存在する増設ラッシュの中で、保健・医療・福祉系大学ではなく、実習施設である病院などの関連機関もない、千葉市の隅に建つ「情報」に特化した単科

加納 佳代子 ● 東京情報大学特命副学長（看護学部担当）

大学が、看護学部を新設する。このことは、18歳人口減少時代の私学経営にとって、吉と出るか凶と出るか「冒険」ともいえる選択である。創設者の榎本武揚は「冒険は最大の師」であると言ったが、少子超高齢・情報社会の中で、この「冒険」から学びながら、予測困難で答えのない時代を切り拓いていく人材を世に送り出すことが、本学の「明日への試み」である。

看護学部では、教育理念である「現代実学主義」のキーワードを「自律と共創」とし、自律と共創の教育を実現するとともに、研究・地域貢献・組織運営に反映させていくこととした。本学ならではの「看護」と「情報」を融合した教育により、これからの地域医療・地域ケアを担うたくましい看護師・保健師を養成する（看護学部看護学科入学定員100名。卒業時看護師国家試験受験資格



看護実習棟（9号館）

家試験受験資格取得。保健師国家試験受験資格20名選択制）。同時に、少子超高齢・情報社会を支える先進的

な取り組みとして、在宅ケアを支える研究拠点となる「遠隔看護実践研究センター」を開設した。本年4月に第一期の新生を迎え、時代と環境の変化に対応できたくましい看護師の養成と、これからの地域医療・ケアに貢献する実践研究がスタートしたばかりである。

2 たくましい看護師の養成

本学の教育理念「現代実学主義」の看護学部のキーワードを「自律と共創」とした。自分で考え、判断し、責任ある行動をとるのは社会人としての基本である。自律した看護師としての基礎力を、自分で自分を律しながら大学生活の中で身に付けていくこととなる。また、教職員はもとより、看護の対象者、学友、諸先輩、地域住民の方々と共に学び合いながら、大切にしていきたい未来の価値を創り出していく経験を重視していく。「自律と共創」の教育は新生生のフレッシュマンキャンパスから開始され、4年間の学生生活の全ての局面で実現していくこととなる。

本学部が育成する人材像（ディプロマ・ポリシー）は次の通りとし、その象徴を「たくましい看護師」と表現した。

- ① 生命に対する畏敬の念としなやかな創造力を持ち、看護の対象を深く理解しながら援助できる者
 - ② 看護実践に関する基礎的能力を修得し、科学的根拠に基づいた適切なケアが提供できる者
 - ③ 情報リテラシーを修得し、高い倫理性を発揮しながら、看護にかかわる情報を実践的に活用できる者
 - ④ 保健医療福祉の職業人と相補的にリーダーシップ・フォロワーシップ、アントレプレナーシップをとりながら協働できる基礎的能力を有する者
 - ⑤ 看護職としての社会的責任を自覚し、社会の発展に貢献し、生涯を通じて知識や技術を修得し続ける者
- 「たくましい看護師」のコアとなる三つの力は、「現場から学ぶ力」「職業人としての基礎力」「情報活用・発信力」である。「現場から学ぶ力」は、現場の出来事から本質を見抜く力であって、自分を育て、長い職業生活を支える力となる。「職業人としての基礎力」は、疑問を持ち、考え抜き、一歩前へ踏み出し、粘り強く取り組み、多様な人々と取り組む力であり、生涯を通して看護師として研鑽し続けていくための基礎力となる。「情報活用・発信力」は、必要な情報を意図的に探

し、情報に振り回されずに選択し、意思決定し、相手に伝わるように伝える力であり、これからの地域ケア・医療を担う看護師として多様な価値観を持つ人々を支える力となる。

そこで、本学部が求める人材像（アドミッション・ポリシー）は、①しなやかでたくましい看護師・保健師を目指す者 ②自己を見つめ、振り返りながら、自ら学ぼうとする意欲のある者 ③多様な考え方を受け入れて理解しようとし、自分の考えや感じていることを適切に表現できる者とした。

少子超高齢・情報化社会の未来を切り開き、住み慣れた地域で人々がその人らしく暮らし続けることを支える看護師・保健師を養成していくことが本学部の使命と考える。地域に貢献するたくましい看護職、地域と共に歩み、地域と共に育っていく看護職である。

3 本学部教育の特徴

本学部教育の特徴の一つ目は、情報活用・発信力を意図的に育むために、総合情報学部との大学共通基礎科目として、「情報リテラシー」「情報モラルとセキュリティ」のほか、象徴科目「看護と情報」を4年間で

けて体系的に学ぶことである。1年次は情報学の基礎、2年次は情報活用の視点から看護過程を学び、3年次は看護現場における情報活用の実際、4年次はICT（情報通信技術）を駆使した「遠隔看護（テレナーシング・Telesensing）」など、これからの在宅ケア・医療を支える最新の知識を学んでいく。

二つ目は、たくましい看護師として自分で自分を育てる力を育むために、象徴科目「キャリアデザインとケア」を設け、各看護学と関連付けながら4年間かけて段階的に学ぶことである。1年次には、主体的に学びながら看護師としての職業意識を形成し、自律性を養いながら「たくましい看護師」への歩み方を学ぶ。

初めての現場訪問先は、全員が訪問看護ステーションである。2年次には、社会人として必要な社会人基礎力を身に付けながら、リーダーシップ、フォローワーシップなど、互いに尊重しあう関係性の中から学びを深めていく。3年次には、さまざまな分野で活躍する看護職との出会いを通して多様な可能性を探る。4年次には、モデルとなる看護職へのインタビュを通して、地域で活躍する自分自身のキャリア像を描き、発表する。

三つ目は、200を超える実習施設の協力により、

地域ケア・医療を重視した実習を行うことである。訪問看護ステーション、地域包括支援センター、特別支援学校、福祉施設といった看護職の今後の活躍が期待される施設で、地域に密着した実習を行う。どのような場所でも働けるたくましい看護師の養成は、多様な実習環境とその協力体制によって支えられる。

新卒時から訪問看護師として働きたい、病気や障害のある子どもたちが学ぶ特別支援学校の看護師になりたい、地域包括ケアシステムの中心となる保健師になりたい、看護師として起業したいなど、学生がさまざまな可能性にチャレンジする機会を大切にしたい。これからの時代を切り拓くためには、従来の価値観だけでは判断ができない。教員が学生から学ぶ姿勢、看護の対象者や住民からの学びを重視する教育によって、失敗を恐れずにチャレンジする学生を世に送り出していきたい。

四つ目は、最新の設備を備えた看護実習棟で展開される実習前教育や実習補完教育によって、「分かる・できる・おもしろい」を繰り返し、主体的に学ぶ楽しさを引き出すアクティブラーニングを展開していくことである。

五つ目は、国家試験対策用電子テキストの採用である。学生全員が、電子テキストの入ったタブレットを授業・演習・実習で活用する。タブレットと電子テキストは、あくまで活用すべきツールにすぎない。教育にとつてはアナログとデジタルのバランスをとつていくことが重要と考える。教員独自の資料を配付しているので、電子テキストはあくまで予習復習用・国家試験対策用である。

教員にも電子テキスト入りタブレットを貸与し、学生が授業内容と関連付けて電子テキストを検索するよう、授業で活用する。学生は、ほかのデジタルテキストや書籍、実習要項といった必要な情報を格納し、検索することができる。また、演習中の動きをお互いが撮影し合つて評価したり、4年間の歩みのポート・フォリオを作成することも可能である。

4 看護実習棟の特徴

実習を重視した大学であることの象徴は、ラーニング・コモンズとしての看護実習棟である。地上3階建て、建築面積1164平方メートル、延床面積3220平方メートルの合理性・効率性を考慮した設計であ

り、柔らかさと力強さを併せ持つイメージをデザインし、学生の意欲をかき立てる建築を目指した。吹き抜けに面してラーニングラウンジを各階に配し、

壁面いっぱいホワイボードや無線LAN環境を整えた。実技演習に伴う講義を行うデモンストレーション室のほか、住まい仕様、公民館仕様、病室仕様、多目的仕様の各実習室によって臨地実習の場を再現しており、効果的なシミュレーション教育の場となる。

各実習室はカメラやモニターを備え、演習中の動きを撮影した映像を見て自分の動作や行動を個人やグループで振り返ることができる。これらは状況設定課題演習やOSCE (Objective Structured Clinical Examination: 客観的臨床能力試験) などで使用し、判断力、技術力、マナーなど、現場で必要とされる臨床技能の習得に活用する。

5 自律と共創のフレッシュマンキャンプ

入学生を迎えたばかりであるので、自律と共創の教育の実践例として、オリエンテーションに続いて行われたフレッシュマンキャンプについて触れておきたい。1泊2日のフレッシュマンキャンプの目的は、「自律と



フレッシュマンキャンプ

共創「どのようなように大学生活を送るか」を意識付け、現在思い描いている「たくましさ」のイメージを言語化した仲間と共有することであり、総合情報学部

学生ボランティアの協力を得て行われた。コーチングゲーム (Points of You) を活用したワークシヨップは、「正解」や「勝ち負け」のない看護という職業を目指す学生だけでなく、基礎教育を担当する教員にとっても、これまでの考え方を変えるきっかけとなった。コーチングゲームでイメージを言語化したことが生かされ、学生全員が「明日から、今日から行うべきこと」を力強く宣言してキャンプを終えることができた。

たくましい看護師への一歩を踏み出した学生と共に、教員も歩み出したところである。

6 これからの展望

看護学部新設と同時に開設された「遠隔看護実践研

究センター」では、大学・訪問看護ステーション・地域住民・公共団体・企業などと連携して遠隔看護の実践的研究を推進し、これからの時代が求めるたくましい看護師の養成を支えていく。また、大学院総合情報学研究科にヘルスケア情報学関連の科目を開講した。将来、保健医療に関わるさまざまな職種による「データサイエンティスト」育成の準備を始めたところである。

東京情報大学看護学部は、始まったばかりである。これまで看護学部開設にとってさまざまな不利な条件と思えたものは、視点を変えて捉えなおすと、本学ならではの可能性として見えてきた。この「冒険」が目指す方向に、間違いはないと確信している。重要な装備は準備したが、あとは走りながら整えることになる。この「部隊」の先頭を歩む学生の姿が教職員を勇気づけ、古い上着を脱ぎ捨てて変化していくに違いない。「自律と共創」を実現する本学部でなければできない教育・研究・地域貢献にこだわりながら、面白い試みにチャレンジし、これまでにないユニークな看護学部として地域に根差していきたい。

わが 大学史の 一場面

日本の近代化と
大学の歴史

医療総合大学として歩んだ10年 ——チーム医療の中核を担う医療人の育成を目指して——

馬場 明道 ●兵庫医療大学学長

1 学校法人兵庫医科大学の設立

兵庫医療大学の設置者である学校法人兵庫医科大学は、1972年4月に創設者の故森村茂樹のもと兵庫医科大学



兵庫医科大学 開学

学を開学し、併せて兵庫医科大学病院も開院。「社会の福祉への奉仕」「人間への深い愛」「人間への幅の広い科学的理解」という建学の

精神を柱に、今日に至る約45年にわたって先進的な医学教育を実践することにより、良質な医師を育成・輩出し、阪神地域の医学・医療の中核を担うのみならず、わが国の医学・医療の発展に貢献してきた。

2 兵庫医療大学の開学

医学ならびに医療技術が革新的に進歩する中で、超高齢化社会への対応は喫緊の重要な課題となっている。これらの背景を踏まえ、本法人は、既に十分な実績を有する医師育成教育の一層の充実を図りつつ、高度な専門性と豊かな人間性を持つ医療専門職者および研究者の養成を担うべく、同一法人下の兵庫医科大学（医学部）の兄弟校として、2007年4月、兵庫医科大学を神戸ポートアイランドに開学した。薬学部（医療薬学科）、看護学



南ヨーロッパ風の校舎の兵庫医療大学

部（看護学科）、リハビリテーション学部（理学療法学科、作業療法学科）の3学部4学科を擁する医療系大学として、開学以来10年、順調に成長し、既に2000名を超える卒業生を輩出している。

わが国のこれからの医療において、医師のみならず、良質の優れた医療人を育成することは大きな社会的課題であり、特に多職種が協働して患者中心の全人的医療にあたる「チーム医療」は、今後の医療のあるべき形として、その推進の必要性が提言されている。このような医療を取り巻く社会環境を背景に、本学は、兵庫医科大学との密接な教育連携のもとに、学部や医療専門職間の壁をなくしたボーダレスな教育環境の中で、将来の「チーム医療」の中核を担う医療人の育成を重要な使命と定め、以下の教育理念と教育目標を掲げている。

〔教育理念〕

人間への深い愛と豊かな人間性を持ち、幅広い知識と優れた技術を備え、社会とともに医療を担う医療専門職者を育成する

〔教育目標〕

- 幅広い教養と心豊かな人格の育成
- 関連分野とのボーダレスな教育環境のもと、専門性の高い知識と技術の修得
- 優れたコミュニケーション能力を基礎とした、チーム医療・地域医療を担える資質の育成
- 次世代の医療科学を担う創造性と国際性の涵養

これらの教育理念と教育目標を本学の教育の基本とし、順次その目的に向かって、教職員一体となって、医療人育成のための教育を実施するとともに新しい大学の体制整備を行ってきた。

本学の教育の特徴は、学部・研究科の高度な専門教育に加え、医療総合大学としての包括的教育を実施することにある。その象徴ともいえるボーダレスな教育環境のもとに、学部・研究科独自の教学実施を尊重しつつ、全学的視点からの調整、検証を行っている。教育委員会がその代表的なものであり、教学実施を俯瞰する委員会と位置付けている。また、学部・研究科ごとに建物を区切らず、教員研究室も混在させることで、教員間に一体感を醸成している。

2011年には大学院看護学研究科（修士課程）と大学院医療科学研究科（修士課程）（リハビリテーション分野）を新たに開設した。さらに、2013年には、大学院薬学研究科（博士課程）を開設し、現行の3学部・3大学院研究科体制を整備した。

3 医療総合大学としての取り組み

本学は全て医療系学部で構成されており、兄弟校の兵庫医科大学も加わって、「医療総合大学」として、医療現場に近い環境で、医療人育成教育を行うことに重点を置いている。その視点から、法人に両大学をつなぐ「医療人育成研修センター」を設置し、本学の共通教育センター（後述）と協働で、教学実施を支援している。

■学部横断教育カリキュラム

本学のカリキュラム構成は、3学部共通の全学共通科目（一般教養科目と医療概論などの本学の特徴となる科目）と学部専門教育に加えて、学部を横断する科目を一部配置している。医療人としての専門性に加え、他医療領域の科目や具体の医療課題を学ぶことにより、医療を包括的に理解可能にすることを目指すものである。具体的な取り組みは後述する。

■ 共通教育センター

学部横断教育カリキュラムの実施主体として、本学では「共通教育センター」を設け、部局と同様の組織に位置付けた上で、ボードレスな教育体制のもと全3学部の基礎教育を担っている。本学の教学の特徴である「チーム医療教育」「アカデミックリテラシー」「語学を含むワベラルアーツ科目」を担当するほか、リメディアル教育も実施している。

■ チーム医療教育プログラム

〔医療概論〕

1年次の医療概論は、全学教員による専門性を生かした医療科学の講義や兵庫医科大学病院で実施する体験学習、さらには学部合同チュートリアルを配することにより、早期か



特定機能病院等多くの指定を受ける
兵庫医科大学病院

ら「チーム医療」に対する学生の意識化を図るものとなっている。

〔早期臨床体験実習〕

3学部合同で、1年次の夏休みまでに兵庫医科大学病院の見学実習を行う。実習は、3学部混成による少人数グループにより、病棟、薬剤部、リハビリテーション部などの病院内各施設で説明を受ける。学生全員が病棟に入って臨床現場の体験実習ができるのは、大学病院を併設する医療総合大学という恵まれた環境にあってこそ実現できるものである。入学後、早期に臨床体験をすることによって、医療専門職者への具体的イメージが描けると同時に、学習へのモチベーション向上にもつながっている。



兵庫医科大学病院での早期臨床体験実習

〔合同チュートリアル〕

兵庫医科大学医学部と本学3学部による、4学部合同チュートリアル学習を1年次と4年次に設け、「チーム医療」を学習する。全学部混成の少人数グループが、課題として提示される具体の症例について、各々の専門性を背景に問題点を見つけ、調査、討議を通じて問題を集約し、かつ、その内容を他者に説明できる総合的な学習能力を身に付けることを目的とする。グループ討議によって診断、治療法などを導き出すものであり、医学部生と共に学ぶことを通して「チーム医療」の一員としての意識を一層高め、将来のチーム医療の実践に向けた幅広い視野とコミュニケーション力を身に付けることを目指す。1年次と4年次の学習を比較して、その間の学修成果を十分に実感できるものとなっている。



4学部合同チュートリアル

4 認証評価の受審

2010年度に全学部が完成年度を迎えるにあたり、大学基準協会が定める大学評価（認証評価）を受審した結果、大学基準に適合していると認定された。

前述のチーム医療教育に関する全学部横断的教育科目、兵庫医科大学医学部も含めた4学部合同のチュートリアルなど、学部の枠にとられないボーダレスな教育を実施していることが高く評価された。

また、地域社会に対する貢献活動や社会連携プロジェクトとして「地域連携実践センター」を設け、「公開講座・健康相談」「地域交流プロジェクト」「講演会・ワークショップ」などに積極的に取り組んでいる点や、ポータイランドにある他3大学と連携して「神戸ポートアイランド・キャンパス4大学連携事業」を推進し、学生と地域の高齢者との交流を目的とした「ポータイ65歳大学」を企画するなど、学生や教職員が一体となって地域と連携し、貢献している点も評価された。

5 グローバル教育の推進

医療の現場においても国際化が進む状況にあつて、国



王立アデレード病院で実習する看護学部の学生

内だけでなく国際的な視点をもった医療専門職者が求められている。教育目標のひとつ「次世代の医療科学を担う創造性と国際性の涵養」に示す通り、国際社会において活躍できる医療専門職者の育成を推進していくため、2014年にはオーストラリアのアデレード大学と学術交流協定を締結し、両大学の看護学部の学生十数名について、毎年3週間の交換留学を実施している。

本学の学生が留学を経験することに加えて、本学が留学生を受け入れることによって他の学生にも国際性を涵養するという点で、波及効果が生まれている。

また、学校法人兵庫医科大学と中国の北京中医药大学が共同設立した「学校法人兵庫医科大 科 科大学 中医薬孔子学院」の構成大学として、

本学も種々の活動に関与している。特に、「北京中医薬大学短期留学プログラム」では、約10日間の日程で、薬学部生を中心に留学を実施している。これらの活動に付随して、本学薬学部に「東洋医薬分野」を新設することとなった。

6 医療専門職者のキャリアパス

医療の世界では、生涯を通して学び続けることが求められる。本学卒業生は、国家資格取得後も、その多くが兵庫医科大学病院やささやま医療センター、関連病院に入職している。このように、本学の医療人育成教育は国家資格の取得によって終了するのではなく、生涯を通じたキャリアパスと位置付けられている。

また、各学部に大学院研究科を設置し、主に社会人の大学院生に対して大学院専門教育を課している。加えて、社会人の職業能力向上の機会拡大を目指す文部科学省の職業実践力育成プログラム（BP）において、本学は、地域医療を担う医療専門職者のキャリアアップを支援するための左記3プログラムが認可されている。

- 地域在宅看護実践力育成プログラム
- PT・OT臨床力ステップアッププログラム

7 社会学連携推進機構

～地域に生き、地域と共に学ぶ～

地域社会における教育研究活動の協働拠点として、「社会学連携推進機構」を設立。同機構は、「包括的医療人育成教育」と「大学と社会の協働」のプラットフォームという位置付けの学内機構である。大学の知見を社会に還元するだけではなく、「地域から学ぶ」という教学の一面を具現化するものであって、社会と連携した本学の教学活動を集約する組織として重要な役割を果たしている。

その取り組みを幾つか紹介する。兵庫県丹波市および兵庫県丹波県民局と連携協定を結び、兵庫県の「丹波薬草産地再生事業」に参画。2014年度からは、兵庫県の「『農』イノベーションひょうご推進協議会」に参画し、兵庫県の特産品を活用した機能性食料品の開発に取り組む企業と連携協定を締結。「ひょうご農商工連携ファンド採択事業」や「中小企業庁ものづくり・商業・サービス革新補助金採択事業」を、連携大学として支援している。

また、漢方の里として知られる兵庫県丹波市山南町和

田地区において、

本学薬学部 of 教員と学生が「(丹波地域) 学生等による地域貢献活動推進事業」に採択された。さらに、20

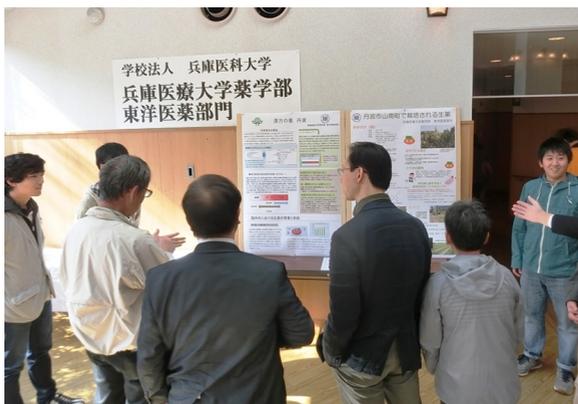
17年度には、薬草の実用的な普及と山南町の広域的な活性化に取り組む「大学等との連携による地域創生拠点形成支援事業

(地域創生拠点形成支援)」「(兵庫県) に採択され、教員・学生が地域住民と共に地域創生事業に取り組んでいる。

8 HUVS vision 20

～次なる10年を見据えて～

本学は、2007年の開学以来、今日まで10年間、着実に教学の実績を積み重ね、順調に発展してきた。チー



兵庫県丹波市山南町における地域貢献活動の様子

ム医療教育を特徴とする医療総合大学としての視点から、独自の教育により、学修成果として良質な医療専門職者を輩出してきた。その多くは、地域に根ざし、先進医療と地域医療に大きく貢献している。

わが国の医療を取り巻く環境は、極めて厳しいものがある。他方、医療人育成のための高等教育も過当競争に入らる中で、いかに人間力豊かで良質の医療専門職者を育成するかは、今後のわが国における医療社会のありようを決める喫緊の社会的課題である。こうした文脈の中で、本学は、開学20年目までに到達すべき教学目標を定め、達成のための基軸、核心課題、行動計画「H U H S vision 20」を策定している。その骨子は、医療人国家資格を超えた総合的学士力の育成に発展させることにあり、次代を担う中核的医療人の育成を目指す社会的使命を内外に宣言するものである。

そのために、学生には「考える力（研究マインド）」を育成する教育プログラムを実施するほか、複雑化するこれからの医療社会に即応するため、教員の研究の推進や新たな統合領域の創成などを目指すものである。

おわりに

本学は、医療人の育成教育という具体の社会的使命を持つことから、これまでも社会との関わりを重視し、求められる大学改革に積極的に取り組み、自ら教学改善を行ってきた。その結果のひとつとして、平成27年度と平成28年度に、文部科学省の私立大学等改革総合支援事業のタイプ1～3部門で各々採択された。今後も公教育を担う高等教育機関としての社会的使命を果たすべく、不断の改革による教学を実施していく所存である。

